

ジャン＝ポール・サルトルと共産党  
1946-1957

竹 本 研 史

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第12巻第2号（2014年3月）抜刷

## ジャン=ポール・サルトルと共産党

1946-1957

竹本 研史

### はじめに

フランスの哲学者、作家であるジャン=ポール・サルトル（1905-1980）が、政治活動という意味でのアンガージュマンを本格的に始めたのは、戦後になってからのことである。そこには自身の従軍体験も含めた第二次世界大戦の経験と反省が深刻な影を落としていたことは想像に難くない。彼の政治活動を考える上でさまざまなトピックの一つとしてよく挙げられるのが、彼と共産党との関係である。両者が1950年代を中心に複雑な関係を辿ったことはよく知られている。1950年、共産党活動家で海軍二等兵曹だったアンリ・マルタンがインドシナ戦争に反対するピラを配ったとして逮捕された、いわゆる「アンリ・マルタン事件」が起こった。サルトルの伝記執筆者アニー・コーアン=ソラルによれば、サルトルは、この事件で支援活動に加わったことを契機に、1952年5月のアメリカの將軍リッジウェイの欧州軍統合司令官就任から、1956年11月のハンガリー動乱までの約4年間に最も共産党に接近した<sup>1</sup>。当時、彼が編集主幹を務めていた『レ・タン・モデルヌ』誌においても、共産党批判は限定的なものだった<sup>2</sup>。こうしたサルトルと共産党との微妙な関係は、1952年から53年にかけて盟友だったアルベール・カミュやモーリス・メルロ=ポンティらとの訣別の原因につながった。彼の思想的変遷は、その文学活動にも大きな影響を及ぼし、共産党の官僚的体質を批判した戯曲『汚れた手』（1948年）は、1950年代以降、反共プロパガンダとして活用されるのを恐れ、サルトル本人の意向で上演されないようになった。

サルトルと共産党との関係に関しては、いくつかの研究が存在する。たとえばクロード・モゾリックは、1930年からサルトルの亡くなる1980年までの長いスパンを3つの

1 Annie Cohen-Solal, *Sartre : 1905-1980* [1985], Paris, Gallimard, «Folio», 2005, p. 549 et sq.

2 Michel Winock, *Le siècle des intellectuels*, nouvelle édition revue et augmentée, Paris, Éditions du Seuil, «Points», 1999, chapitre 52 (ミシェル・ヴィノック『知識人の時代——バレス/ジッド/サルトル』塚原史ほか訳、紀伊國屋書店、2007年、第52章)。引用にあたって、邦訳のある外国語文献については大いに参照したが、若干の字句・表現を変更したことをお断りしておく。

時期に分けて両者の関係を簡潔にまとめている<sup>3</sup>。またエマニュエル・バローは、ソビエト連邦の歴史をひもときながら、サルトルのソ連に対する立場がトロツキー以来の伝統に則っているにもかかわらず、彼がその流れにあるはずのローザ・ルクセンブルクの思想を看過している可能性を指摘した<sup>4</sup>。

本稿は、サルトルが共産党にとりわけ接近したとされる1946年から1957年までという限定された時期を対象として、3つに時代区分の上、それぞれの時期を代表するテキストを分析する。彼の言説レベルでの1950年代の共産党あるいはマルクス主義との関係の変遷を明らかにすることによって、わたしたちは、『弁証法的理性批判』（1960年）へと至る理路を示すことを目的とする。具体的には、第1節で、マルクス主義に対して批判的なスタンスをとっていた戦後まもない時期の「唯物論と革命」（1946年）、第2節で、1950年代半ばサルトルが最も共産党に接近し、クロード・ルフォーやメルロ＝ポンティなどから批判も浴びた「共産主義者と平和」（1952、1954年）を、第3節で、ハンガリー動乱により、共産党から訣別したのちに書かれたテキスト「スターリンの亡霊」（1956、1957年）および『方法の問題』（1957年）を取り上げる。

## 1：唯物論的神話と革命の哲学

本節では、「唯物論と革命」の分析を通じ、戦後間もない頃のサルトルとマルクス主義との関係について考察しよう。

サルトルは、この「唯物論と革命」においてまず、唯物論を「一つの形而上学」とみなし<sup>5</sup>、彼はその理由を3つ挙げる。1：神の存在および超越的な合目的性の否定。2：精神運動の物質運動への還元。3：世界およびそこに住む人間を、普遍的な諸関係によって互いに結びつけられた諸物質の体系に還元することを通じて、主観性を抹消しようとしていること（*S III*, 105/98-99）。精神的なものを仮象とし、物質的なものを根源とみなす唯物論の本義からすると、サルトルの指摘はごく一般的なものであるように思われる。

ところがサルトルは、自らの指摘に対して唯物論者たちから、科学的知識を第一に奉じる自分たちこそ形而上学に対し批判的であるという反論を予想する。そこで彼は、こうした反論を先回りして封じようとする。彼が「形而上学」とみなす第2の理由に

3 Claude Mauzauric, «Sartre et les communistes français», in : Emmanuel Barot (dir.), *Sartre et le marxisme*, Clamency, La Dispute, 2011.

4 Emmanuel Barot, «Entre Marx et l'URSS», in : E. Barot (dir.), *Sartre et le marxisme, op. cit.*

5 Jean-Paul Sartre, *Situations III : Lendemain de guerre* [1949], Paris, Gallimard, 2003 (J-P・サルトル『哲学・言語論集』白井健三郎ほか訳、人文書院、2001年)。以下、(*S III*, 原著頁数/邦訳頁数)と略記し、引用末尾に指示する。

関しては、観念論者に向かって物質を精神に還元して形而上学をつくと非難する唯物論者に対し、サルトルは、唯物論者もまた精神を物質に還元しながら、形而上学をつくらずに済ませていると批判する（*S III*, 106/99-100）。彼は、こうした唯物論者の態度の背景に、唯物論者と観念論者の対立があると見る。両者のあいだには、精神に根源とおくか、物質に根源をおくかの違いはあれ、一元論という点では共通していると彼は考える。こうした見方は、1946年の「唯物論と革命」の時点のみならず、1960年の『弁証法的理性批判』で同様の批判をしている<sup>6</sup>。したがって、この観念論と唯物論に対する彼のスタンスでは、1950年代を経ても一貫しているということになる。

第1、3の理由についてサルトルは、科学と主体性の双方から抜け出ることによって、人間が神の地位に取って代わり、自らの主観性を否定し、客観的存在として自然を俯瞰していると主張する（*S III*, 106-107/100-101）。彼によると、唯物論者は、世界がわれわれ人間の活動や現実を生み出すとみなしているにもかかわらず、人間はその現実が理性的だと把握していると考えている（*S III*, 108/101）。人間の活動を可能にしている世界の現実について、世界から作られた側の不完全な人間のほうが十全に把握できるとする唯物論者に対して、彼は疑問を投げかけているのである。彼は、人間と世界とのあいだに非対称な能力関係がある以上、仮にこの人間による世界の現実に関する十全な把握が真理であれば、その非対称な関係を飛び越える何らかの「根もない一信仰、一つの習慣」がなければならないと主張する。唯物論は、形而上学に抗して科学を打ち立て、物質を根源とする必要がある。だが、飛び越えてしまうということは、綿密な論理性や客観性を積み立てていくことを放棄したことを意味している。唯物論は、「客観的な」科学に立脚しながら、精神を物質に還元する根拠を問われると、主観的で「一つの人間の態度」<sup>7</sup>に逃避しているのではないか。サルトルはそのように疑義を呈する（*S III*, 122/117-118）。彼は、唯物論が科学を打ち立てたつもりにもかかわらず、実際は、その科学に抗して別種の形而上学を立ててしまっていると主張するのである（*S III*, 109/103）。

またサルトルは、のちに『弁証法的理性批判』でも、自然法則をそのまま安易に唯物論に適用するエンゲルスを批判するが<sup>8</sup>、すでに「唯物論と革命」において、マルクス主義の科学性・客観性を示すために自然科学に拠って立とうとするエンゲルスを批判している。一つ一つ具体的な科学の例を挙げながら、彼は、エンゲルスやロジェ・ガロディらの誤りを指摘することによって、弁証法の運動と科学の運動とを峻別しよ

6 Jean-Paul Sartre, *Critique de la raison dialectique*, précédé de *Questions de méthode*, Texte établi et annoté par Arlette Elkäim-Sartre, Tome I, «Théorie des ensembles pratiques» [1960], Paris, Gallimard, 1985, p. 146 et *sqq.* (『サルトル全集26：弁証法的理性批判——第一巻 実践的総体の理論 I』竹内芳郎ほか訳、人文書院、1962年、21頁以下)。

7 本稿の強調はすべて原著者によるものとする。

8 J.-P. Sartre, *Critique de la raison dialectique*, *op. cit.*, p. 145 et *sqq.* (『弁証法的理性批判 I』、前掲書、20頁以下)。

うとする。彼は弁証法について次のように語る。

[...] こうした〈弁証法〉の原理 [ヘーゲル哲学のように、一つの「理念」が、反対の理念を生み出す巨大な運動の原動力となる弁証法] とは、全体がその部分を支配すること、一つの理念がそれ自身で充足し豊かになるように目指すことである。またこの原理とは、意識の進展が原因から結果へといたる直線的なものでなく、総合的かつ多次的であるということである。なぜならば、おのおのの理念は、自らのうちに、それに先立つ諸理念の全体性をとどめて同化するからである。そして、その概念の構造は、万が一の場合、別の結合をつくるためにほかの要素と連合する不変の要素を単に並置するだけではなく、その概念の構造の二次的構造が、全体から切り離されて考慮されないことで、「抽象的」になったり本性も失わなかったりするような組織を統一したものだからである (S III, 109-110/104)。

弁証法の原理とは、一つの理念が諸理念の全体性に同化することによって、全体が部分を支配する総合的なものでありながら、諸要素が並置されず、全体に従って多次的にまとめられているということである。これに対し、科学の世界とは、あくまで量の世界であり、一つに統一しているように見えても、外見だけのものに過ぎず、諸要素は単に隣接関係にあるだけである。つまり科学の世界とは、弁証法的統一と正反対の関係にあるわけだ (S III, 110-111/104-105)<sup>9</sup>。

この弁証法の原理と科学の世界の根本的差異からサルトルが導き出そうとするのは、階級闘争と生存競争とは根本的に異なるという事実である。すなわち前者は、プロレタリアートが階級なき社会という統一のなかにブルジョワ階級を吸収する。後者は、強者によって弱者が完全に殲滅させられる (S III, 112-113/107)。こうしてサルトルは、科学と弁証法を意図的に混同しようとする唯物論者に対して、彼らの主張の正当性に疑義を突きつけるのである。

ここで、唯物論と観念論の双方とも批判的態度をとるサルトルは、唯物論と観念のどちらとも異なったオルタナティブな思想を持ち出してくる。それが、「革命の哲学 (philosophie révolutionnaire)」である。この「革命の哲学」は、「人間全般の哲学」として普遍性を目指すものである (S III, 164/161)。彼は、この「革命」という言葉について、歴史家アルベール・マチュによる「革命」の「ア・ポステオリな定義」を

9 ただし、サルトルのこうした科学の捉え方は、化合物の例ひとつとってもいささか強引なように思われる。たとえば彼は、化合物の分子について、ひとつの分子のように見えても、酸素の原子は依然として存在しており、別々の原子が隣接し合っているに過ぎないと語っている (S III, 111/105-106)。だが、たとえ分子内で原子が結びついて隣接しているとしても、分子そのものの性質は、酸素やほかの原子それ自体の性質から根本的に変化するわけで、単に隣接しているだけとは言えないだろう。

踏襲している (*S III*, 132/128)。つまり、「諸制度の変化が所有制度の深い修正を伴うと、そこには革命が存在する」というものである。サルトルは、こうした「革命」を意図的に準備する党や党のなかの個人を「革命家 (révolutionnaire)」と呼ぶ。彼によれば、「革命家」とは、アメリカの黒人やユダヤ人といった社会制度の周縁に追いやられている人びととは異なり、自らがそこで生活している社会制度を構成する一員として、非抑圧者であると同時に、自らを抑圧している社会を支配者のために柱石として支える労働者でもある。すなわち、「革命家」は支配者によって抑圧を受ける一方で、その支配者による支配の維持に加担する矛盾した存在である。ただし「革命家」は、単なる境遇の改善のみを求める労働者たちともまた異なっている。「革命家」は、歴史の観点から状況をいったん超克することによって「総合的全体」として、なかば外部に立って捉えることによって、徹底的に将来の新しい状況に向かって現在の状況を超越できる (*S III*, 132-134/128-130)。こうした「革命家」のあり方こそが、サルトルによれば「自由」なのである。だが、「革命的行為」が「自由」だといっても、「無政府主義的自由」でもなければ「個人主義的自由」でもない。この「自由」は、他者の自由の承認であり、また他人の自由によって自らが承認されることを要求するものである (*S III*, 159-160/156-157)。サルトルは、「革命家」の役割と「自由」との関係について次のように述べている。

[...] 革命家は被抑圧階級のただなかであって、また被抑圧階級全体のために、より理性的な社会的地位を求めているため、その自由は自らの階級全体の解放、より一般的には、あらゆる人間の解放の行為のうち存するのである。この自由は、その起源において、他者の自由の承認であり、また他者の自由によって承認されることを要請するものである。そういうわけで、この自由は初めから連帯性のレヴェルに位置しているのである。そして革命的行為はそれ自身のうちに自由の哲学を前提として含んでいるのであり、あるいはお望みなら、その行為は、自らの現実存在そのものによって自由の哲学を創っている。だが同時に革命家は、その自由な投企によって、またその投企のなかで、被抑圧階級のなかの被抑圧者として自己を見出すため、彼のもともとの立場からして、抑圧を説明することが必要である (*S III*, 160/157)。

上記の通り、「革命家」は、被抑圧階級のなかでその一員として自らも含む被抑圧階級全体の解放、ひいてはあらゆる人間の解放を求めて闘う。その最終的な目標が、他者からの自由の承認である。ここでの他者とは被抑圧階級ではないもの、すなわち支配者のことを指している。「革命家」は、支配者から被抑圧階級全体の自由を認めてもらおうという要求や、支配者の自由が、あくまで被抑圧階級の承認によって認められているに過ぎないという事実を支配者に対して突きつける。同時に、被抑圧階級の

一員として、なぜ支配者から被抑圧階級が抑圧を受けなければならないのか、そのメカニズムと欺瞞について被抑圧階級のために説明しなければならない。

ところが彼によれば、上述で示した通り、「革命家」は、アメリカの黒人やユダヤ人のような被差別に喘ぐさらなるマイノリティからは現れない。そこには、あくまで外部に立って将来の新しい状況に向かって現在を超越する「革命家」の「自由」を想定するサルトルの限界が露呈されているのではないか。

サルトルはそれにしても、被抑圧階級内で「革命家」とほかの労働者たちをどのように結びつけようとしているのだろうか。彼はこの「自由」の獲得のために、「労働」の観点から人間の諸関係を結びつけようとする。彼によれば、「労働」とは、自然に対する人間の把握であると同時に人間相互の最重要の関係である。サルトルは、「労働」を通じて勤労者同士を同じ階級に属する者として連帯を結ばせようとしている。その主導者こそが、「革命家」なのである。「革命家」が必要とされるのは、「革命家」がいなければ、被抑圧階級に属する勤労者たちは、各々で勝手に暴発して単なる暴徒に変わる恐れがあるからである (*S III*, 134/130-131)。ここで、先ほどわたしたちがサルトルに対して投げかけた疑問が一部氷解することとなる。つまり彼が、「革命家」を黒人やユダヤ人のような人種カテゴリーのマイノリティから誕生させないのは、彼が「自由」を考察するにあたって、「人種」の問題はさしあたりペンディングにしたうえで、あくまで「労働」と「階級」という観点を重視しているからなのである。

さてサルトルは、ここまで「革命家」と「自由」との関係を論じながら、革命家自身はこの「自由」を信じてはいないという主張を始める (*S III*, 145-146/142-143)。なぜならば、「革命家」自身が現在の自分の状況を自由だと感じているならば、それは支配者の哲学である観念論が築き上げた既存の権利や価値に甘んじているだけの「内的自由」にほかならないからである。言い換えれば、「自由」という価値を信じていないからこそ、「革命家」は支配者に対して闘いを挑むことができるのである。

それでは、支配階級による既存の価値とは異なった、どのように新しい将来の秩序に向けた価値を示せばよいとサルトルは構想するのだろうか。彼は、それにあたって「革命の哲学」が明らかにしなければならない点を4つ挙げる。1：人間は正当化されえないものであり、その現実存在は彼自身が作ったものでもいかなる神がつくったものでもないという意味で偶然なものであること。2：したがって、人間によって設けられた社会秩序はすべてほかの秩序に向かって超えられうるものであること。3：ある社会でおこなわれている価値体系はその社会構造を反映し、それを維持しようとするものであること。4：それゆえ、この価値体系はつねにほかの体系に向かって超えられうるものであり、新しい体系は、いまだ明らかにされてなくとも、現在の社会成員によって現在の社会を超えていこうとする努力そのものによって案出されていること (*S III*, 144/140-141)。つまり、人間は人間自身が作ったのも神がつくったものでもないという点で、そこには創ろうという意志が介在しないため、人間の現実存在

は偶然のものであり、偶然が作用するため既存の社会秩序とはまったく違う秩序を生み出すことが可能であるとサルトルは主張するのである。

この新しい将来の社会秩序に参画できるのは、もちろん被抑圧階級だけではない。この「革命の哲学」は、支配者の立場たるブルジョワに対しても向けられている。というのも、ブルジョワもまた、抑圧者であるがゆえにその抑圧の構造を蒙っているという点で被抑圧者でもあるからである。そのブルジョワは、自らが偶然の存在であり、ほかの自由な人によって承認されることで「自由」を保証されているに過ぎないという事実から出発し、自分を他の人びとと同列の人間として認めることが必要であるとサルトルは説く。それが実現し、初めて「革命的ヒューマニズム」は、人間の解放のために働く人びとによって意志され、創造され、支えられ、社会的闘争を通じて獲得される具体的真理として露わになるとサルトルは述べる (S III, 165/162-163)。

こうして改めて見てみると、戦後直後のサルトルと1960年代のサルトルとのあいだでは、唯物論者たちの疑似科学主義に対してはきわめて批判的な立場をとっており、従来のマルクス主義とは違う新たなマルクス主義のありようを提示しようとしているという点で一致している。してみれば、1950年代の共産党への接近時期も含め、サルトルのこうした見方は一貫していたと捉えていいのだろうか。次節では、最もサルトルが共産党に接近した時期の思想を取り上げていくことにする。

## 2：共産主義に最接近するサルトル

1950年代初頭から、上述のようなマルクス主義者へのサルトルの対決姿勢に変化が見られるようになった。リッジウェイの欧州軍統合司令官就任でフランスひいてはヨーロッパに対するアメリカの影響力の増大を恐れたサルトルは、左翼の大同団結を模索するようになり、彼はこれまで対決姿勢を貫いていた共産党に接近する。そのころの代表的なテキストが「共産主義者と平和」であり、執筆の契機となったのが、フランス共産党書記長代理であったジャック・デュクロが暴動を企てた容疑で逮捕されたことだった。1949年ごろからソ連の「収容所列島」の存在もすでに明らかになっていたにもかかわらず<sup>10</sup>、サルトルはこのテキストで、ソ連こそが、アメリカを初めとする西側諸国に抗する平和の擁護者であるとみなしている<sup>11</sup>。

先に見たように、「唯物論と革命」でサルトルが対峙していたのは、マルクス主義

10 M. Winock, *Le siècle des intellectuels*, op. cit., chapitre 49 (ヴィノック『知識人の時代』、前掲書、第49章)。

11 Jean-Paul Sartre, *Situations, VI : Probleme du marxisme, I*, Paris, Gallimard, 1964, p. 96 et sqq. (『サルトル全集22：シチュアション VI ——マルクス主義の問題1』白井健三郎ほか訳、人文書院、1966年、79頁以下)。以下、(S VI, 原著頁数/邦訳頁数)と略記し、引用末尾に指示する。



者と支配者の立場たるブルジョワであった。対して、「共産主義者と平和」では、ブルジョワたち反共産主義者を「ねばねばした鼠たち (rats visqueux)」と呼んで嫌悪感を露骨に示した。このように、戦後まもなくの時期と1950年代前半とでは、サルトルのスタンスが大きく変化したことは言説レベルでも確認できる。

だが、あくまで共産党の外部から共産党擁護の論陣を張った「共産主義者と平和」においてすら、サルトルと共産党との関係は必ずしも単純に蜜月関係とは言えない。彼は、この「共産主義者と平和」の執筆目的を、共産党と自らの関係から次のように述べる。

この論文の目的は、はっきりとしたかつ限定された主題に関しての共産主義者たちとの私の一致を表明することにある。だがそれは、私の原理から出発した熟慮によるものであって、彼らの原理から出発したものではない。その理由を見ていこう。トゥール大会以来、「左翼の」人びとや集団が、原理上の相違を強調しながらも共産党との事実上の一致を宣言することは、いくたびとなく起こった。そうした協力が〈党〉にとって望ましいと思われたならば、党は相違があるにもかかわらず、そうした同盟を受け入れていた。今日では、状況が〈党〉にとってもわれわれにとっても非常に変わったため、〈党〉はさまざまな相違のせいで同じような同盟を部分的に望むべきだと私には思われる (S VI, 168/135-136)。

ここで重要なのは、サルトルはまずあくまで彼自身の原理によってマルクス主義、あるいは共産党と接近したのであって、共産党の原理に感化されて接近したわけではない。また、少なくともサルトルの見立てでは、共産党の側もまた、ほかの左翼の側とのあいだに多少の思想的な差異はあったとしても、それを受け入れ、同盟する余地はあったということである。さらに、この2点から必ずしもサルトルは完全に共産党の思想に一致していたわけではなかったということも理解できる。

まずは、第1節で論じた、「唯物論と革命」における労働者の抑圧に関するサルトルの捉え方が、「共産主義者と平和」においてどのようにその捉え方が変化したのかを確認したい。労働者と抑圧に関して、サルトルは、「本来の暴力」とは、抑圧そのものをさすのではなく、労働者同士で職の逆競りをおこなわせて、たとえ自分がその職に採用されたとしても、そのことによってほかの労働者たちの労働条件の水準を下げてしまうということ、すなわち抑圧を労働者や失業者がそれを内在化してしまうことによって、自分自身がその抑圧を所与のものだとみなすよう労働者や失業者本人に押し付けてしまう二次的な抑圧のことであると述べる (S VI, 148/119)。

しかしながら、こうした抑圧の受苦とそれを自ら所与のものとして二次的に抑圧してしまうことは、受難の存在として彼らが受動的に蒙っているわけではない。サルトルはプロレタリアについて次のように説明している。「プロレタリアは必然的に能動

的である以上、その受動性はプロレタリアが選んだ行動形式である。なぜなら、その受動性は情勢に応じて適応されるものだからである」(S VI, 215/173)。つまり、否応なしにプロレタリアは受動的立場にあるのではなくて、あえて「能動的に」この抑圧の受動性を率先して選択しているのである。労働者の一見したところ受動的に思えるこうした能動的側面に着目するサルトルは、そもそも彼らに能動性がなければ、「自由」を求めようとする彼らにはこうした抑圧的情况を超克できないと指摘するのである。

「共産主義者と平和」においては、「自由」とは、抑圧の問題に直面した際に、なにがしかの具体的な解決策を発明し、それを提案するような具体的で積極的な力と定義されている(S VI, 250/201)。サルトルにとって、この「自由」は、労働者に対し、たったひとり孤独のなかで批判し、疑い、投票し、餓死することができるような、ブルジョワ民主主義が与えるような自由と根本的に峻別されるべきものなのである(S VI, 241 et sqq./194以下)。彼は、労働者が望んでいるのは、これらの権利よりもまず統合されることだと説く。すなわち、労働者は孤独からの解放こそがまずもって重要なのであり、この自由に関するサルトルの峻別には、労働者とブルジョワとのあいだでは、政治に求めるべき切実感のグラデーションが決定的に異なるという彼の考えが透けて見える。

[...] 労働者にとっては、政治はぜいたくな活動ではありえない。それは労働者の唯一の防御であり、ある共同体に統合するために労働者が自由にできる唯一の手段である。ブルジョワとはまず統合されており、孤独とはその粹がりである。労働者とはまず孤独なのであり、政治とはその欲求なのである。前者は、自らの市民としての権利を行使するためにある政党を支持する人間であり、後者は、一人の人間となるために政党に入るだろう「人間以下の人間」である。一方は、政治の現実、すなわち階級闘争を一瞬だけ垣間みる。他方は、まず階級闘争を耐え忍び、階級闘争の対象であり、ときには、今度は自分が活動を率いることができるだろうと予感する。ブルジョワにとっては、政治の外に一切が存在する。労働者にとっては、政治の外には何も存在しないのである(S VI, 242-243/195-196)。

ブルジョワにとって政治とは、あくまで既得の市民権を守り行使するためだけの一つ的手段に過ぎず、重要なのは、それ以外の既得権をもって過ごしている平穏な日常生活全般である。それに対して、労働者は市民として、一人の人間として、平穏な最低限の日常生活を送ることのできる権利すら一切与えられていない「人間以下の人間」であるため、自ら積極的に活動する政治、とりわけ階級闘争だけがすべてであり、唯一自らを守ってくれるものである。しかも、孤独な状態におかれた労働者は、積極的に打って出て活動することを通じて、初めて同じような境遇の仲間と遭遇するチャン

スが生まれる。

しかし、このような「人間以下の人間」として、各人が孤立した状態におかれて二重の意味で抑圧を受けている労働者にとってみれば、そのような疲弊した状況でなかなか同じような境遇の仲間を求め、彼らの代表として自らの考えを主張する余裕などあるだろうか。サルトルによれば、大衆とはなにも要求せず、ただ分散しているだけである。ここで、そのような境遇におかれた大衆の気分に関して情況の客観的な可能性について推測し、孤立状態におかれた彼らを階級として統一しようと導くのが活動家のなすべき役割であり、その活動家たちを束ねるのが〈党〉の指導であるとサルトルは述べる（S VI, 369, 248/294-295, 200）。

それでは、大衆と活動家との関係から一步進んで、大衆と党との関係をどのように捉えればいだろうか。サルトルは、リッジウェイの前任者アイゼンハウアーが就任した際に、その反対運動で共産党が主導的に果たしたことを踏まえつつ、大衆政党の役割について次のような意義付けをおこなっている。

それ〔党〕が彼ら〔大衆〕の目に表象するものは、彼らの熱望や、彼らの傾向、彼らの意志、ただし最も赤熱するまで至った意志、すなわち効力の最も高まったレベルにおける意志である。ときには大衆が党に従い、ときには大衆が党を引きずり込むことさえあるが、大衆が後衛にとどまることもありうる。それはたいしたことではない。もし党が大衆の名において語ることに確信があれば、もしある偶発事のみが原因で大衆が党に従わないと党が判断すれば、党は思い切った行動に出る。つまり、党は大衆のために、かつ大衆の名において行動する。大衆は活動であると同時に受難なのである（S VI, 155-156/125）。

このように、サルトルは大衆政党の動きについて、党と大衆との関係のありようは両義的であると述べている。党は大衆の願望や意志を忖度する一方で、党は大衆を組織化し教育をおこなう指導的な役割を果たす。別の箇所では、サルトルは、大衆は到達すべきあまりに単純な目標を指し示し、それに対して活動家は、その目標達成のための最短ルートを見つけ出すものであると語っている（S VI, 376/299）。ただし、党は大衆のために、そして大衆の名においてあくまで行動しなければならない。上の引用の直後で、「〈党〉とは、純粹活動なのだ。党は、前進したり姿を消したりしなければならない」（S VI, 156/125）と彼は言う。党は主導的な立場を担う一方で、大衆の影として、大衆を援助すべきときは前に出て、適切でない場合は後退すべき存在なのである。

ちなみにここで言う、「純粹活動」とは何か。大衆は各人、特殊利益を背負わされている。換言すれば、大衆にはしがらみがある。そのようなしがらみが各人であれば、大衆は圧政者に対して抵抗しづらいし、大衆が足並みを揃えて労働者階級を統一し組

組織するのは困難である。そのためサルトルは、受難に喘ぐ大衆と活動家とを区別したうえで、こうした労働者階級の統一と組織化は、純粹行動をとる活動家によっておこなわれなければならないと説く。「[...] 活動家の労働は、対象としての大衆に対して行使され、この対象としての大衆を、主体としてのプロレタリアに変形する」(S VI, 352/281)。活動家の労働によって、対象としての受動的な大衆は、主体としての能動的なプロレタリアに変化する。このように、労働者は、プロレタリア、大衆、どちらにもなりうる存在なのである。

党は、特殊利益を背負ってなかなか動きのとれない大衆に代わり、思い切った行動をとり大衆を導く一方、あくまで大衆の影としてときには姿を消す。にもかかわらず、自らの影であるはずの党について、大衆には、「〈党〉がなければ、統一も行動も階級もない」(S VI, 248/200)。サルトルにおいて、大衆は、党に依存するという権力関係におかれることになるのは明白である。

この権力関係の下、大衆は、自らを導いてくれる〈党〉の諸原理を無意識に受容することで自らの思想を形成する。そうなると、もともと活動家に対し大衆は単純な目標を示し、活動家は大衆にその最短ルートを示すという役割分担だったはずが、目標の提示すら〈党〉が大衆に掲げるようになるのは想像に難くない。〈党〉が労働者の「自由」となっていく過程を、サルトルは次のように描いている。

組織体によって主体へと変貌した労働者は、その変身から出発して自らの実践的現実を発見する。労働者が何を考え、何をなそうと、それはこの彼の改宗 (*conversion*) から出発しておこなわれる。そしてこの改宗が今度は、〈党〉による現在の政策の枠内でおこなわれる。それゆえ、与えられたものを超克するという——別様に言えば、行動するという——単に彼の力に過ぎない彼の自由は、組織体というこの所与の現実のただなかで表明される。労働者は、〈党〉が彼に課す諸問題に基づき、かつ〈党〉が彼に与える諸原理から出発して、自らの思想を形成する。要するに、その諸原理が彼の無意識のうちに刻み付けられ、彼の自然発生的な反応や、あるいはブルジョワ社会の矛盾により生み出される政策を理由に、労働者は〈党〉を裁くことはない。労働者は、〈党〉により訓練され、養成され、彼自身以上に育成される結果、彼の自由とは、組織体の内部で、かつ共同の目的にむかって、もろもろの行為により各個別状況を超克する力以外のなにものでもない。一言でいえば、〈党〉が彼の自由であると言えよう (S VI, 250-251/202)。

労働者は、《〈党〉という組織体に入る＝「改宗」する》ことによって、かつての「人間以下の人間」という存在から「主体」という人間になることができた。だが、いったん自らを解放してくれた〈党〉の内部にとどまることによって、初期のこうした労働者と〈党〉との幸福な関係は変化する。〈党〉による現行の政策の範囲内で、

労働者は〈党〉が与えてくれる諸問題と諸原理を通じて、訓練、養成されることによって自らの思想を形成する。労働者の主体性もその自由も、〈党〉という枠内でのみ発揮できる。しかし、その自由も主体性も、〈党〉の方針というバイアスにかかった限定され歪曲されたものでしかない。〈党〉という組織体の内部で、〈党〉の方針のもとで共同の目的に向かって自らの行為により各人の特殊状況を超克する力、それこそが、彼の「自由」なのである。その結果、「〈党〉＝労働者の自由」となり、〈党〉が彼のすべてとなってしまうわけである。

階級の自律的發展を訴えるクロード・ルフォールは、こうした〈党〉の媒介を主張するサルトルを批判した。

サルトル本人は、このルフォールの批判に対して「ルフォールに答える」(1953年)で反論した。彼は、ルフォールへの反論に際して、自らに対するルフォールからの批判を「作り話」と非難のうえで、彼からの批判を4つにまとめている。1：少数者の差異化、2：党と大衆との距離の創造および官僚主義的独裁、3：少数者による大衆の搾取体制化、4：「改良主義」が、資本主義的搾取体制に身を置こうとする少数者を特徴付けていること。ところがじつは、これら4つの論点のうち、最初の3つが、奇妙なことに、共産党を擁護しているはずのサルトル本人が「共産主義者と平和」で、すでに指摘してしまっているのではないだろうか<sup>12</sup>。

本節の冒頭で論じたように、サルトルが共産党に対して最も接近したと言われる「共産主義者と平和」では、彼が本来、共産党と自身とのあいだで思想的スタンスに相違があることを認めながら、時局に鑑みた大同団結のため、両者のあいだで事実上の一致を得ようとしたことが、執筆の動機として記述されていた。

それにもかかわらず、ここで触れたサルトルの文言は、彼の動機付けに反して、結果として、一種の共産党批判となってしまうのではなかろうか。すなわち、「共産主義者と平和」は、《〈党〉が労働者に対して与えてくれるまよかしの自由を描くことを通じて、自らを解放してくれるはずの〈党〉が労働者を抑圧していくという》構図を描いてしまっている。そしてこの描写は、のちにサルトルが『弁証法的理性批判』で描いた、諸個人が権力から自らを守るために結成されたはずの集団が、やがて集団の維持そのものに目的が変貌し、組織防衛のためにそれを乱すおそれのある個人を抑圧する》という集団形成と崩壊の図式をすでに示唆しているように思われる。

12 Jean-Paul Sartre, *Situations, VII : Problème du marxisme, 2* [1965], Paris, Gallimard, 1980, p. 75-76 (『サルトル全集32：シチュアション VII ——マルクス主義の問題2』白井浩司ほか訳、人文書院、1966年、58頁)。以下、(S VII, 原著頁数/邦訳頁数)と略記し、引用末尾に指示する。

### 3：ハンガリー動乱以後

このサルトルの「共産主義者と平和」については、『弁証法の冒険』でかつての盟友メルロ=ポンティから、1953年7月の訣別の2年後に強い批判を受けているが<sup>13</sup>、この批判の直後にサルトルが執筆したのが「スターリンの亡霊」および『方法の問題』である。『方法の問題』は1957年に初出発表され、『弁証法的理性批判』の序論として位置づけられ、同書に所収されている。

「スターリンの亡霊」の執筆背景にハンガリー動乱があったことはよく知られている。「スターリンの亡霊」とは、スターリン亡き後のソ連において、非スターリン主義化が図られながらも、その政策を進めているやり方そのものはスターリン主義のままであるとサルトルが批判したものである。

サルトルは、ひとまずソ連のハンガリーへの介入が避けられなかったことを承認する。その上で、ハンガリー政府がこのソ連の軍事介入を招いてしまったのは、合法政府が単に、大衆の統制力を失い、彼らの代表たりえなくなったからだとして政府の無能さを指摘する（*S VII*, 158/131）。彼がこの点から論考を出発しようとしていることを踏まえれば、「スターリンと亡霊」というテキストで彼が示そうとしているのは、〈党〉の自壊作用と共産主義・社会主義国下の矛盾であろう。一例を挙げれば、サルトルは、ソ連の根幹であるべき計画経済の矛盾を次のように説明している。人間の欲求は何よりも重大で、統治する側はその欲求をできるだけ満たす必要があるが、それにもかかわらず、この欲求は生産を阻害する否定的要因となる。また、大衆には自らの欲求を示す力がないため、専門家が彼らに相応しいものを決定するというものである。さらに、ソ連国旗が象徴している通り、「鎌と槌」によってソ連経済が成り立っているにもかかわらず、工業化による人口増加とそのことによる農業生産力の増大の要請により、賃金不足を補填するための農産物価格の引き下げを要求する労働者と、反対に工業製品にまでおよぶ物価の引き下げを要求する農民とが対立している（*S VII*, 223-225/179-180）。

同時期に発表された『方法の問題』をみると、このような対立や分裂は、〈党〉の指導者たちが最も恐れるものであることが読み取れる。〈党〉が自らの下で統一を図るべく、大衆が自らの欲求を示す力を持たせぬよう、大衆の実践が及ばないところに教条をおこうとしているとサルトルが分析している。

13 サルトルとマルクス主義および共産党との関係を考えるうえで、メルロ=ポンティの批判は非常に重要な意味を持つ。さしあたり、この点については、拙稿「サルトルの『応答』——『弁証法的理性批判』における『集団』と『第三者』」、澤田直編『サルトル読本』、法政大学出版局、2014年近刊を参照。また、病理学的観点から鋭敏に分析したものとして、澤田哲生『メルロ=ポンティと病理の現象学』、人文書院、2012年、168頁以下がある。

[...] 集団の統合化を極限まで押し進めることに熱中する〈党〉の指導者たちは、真理の自由な生成があらゆる討論や争いを伴って闘争の統一を破りはせぬかと恐れた。彼らは路線を決定し出来事を解釈する権利を自分たちの手元にとどめておいた。そのうえ経験が、経験特有の光をもたらし、いくつかの彼らの指導理念を問い直し、「イデオロギー闘争の弱体化」に資するのではないかと危ぶんで、彼らは教条を経験の力の及ばぬところにおいた<sup>14</sup>。

この帰結として、〈党〉の指導者たちが、大衆の実践ではなく、〈党〉の理論をあくまで優先させるため、〈党〉の官僚政治という「一種の暴力」が大衆に向けられることになる。サルトルはさらに、「唯物論と革命」で彼が批判していたマルクス主義の絶対的な観念論に、共産党が辿り着くことになることを主張する。第1節から振り返ってみれば、マルクス主義による観念論への一元化というサルトルの見方は、1957年の『方法の問題』を経て、1960年の『弁証法的理性批判』にいたるまで一貫した批判的対象であることがわかる。

サルトルは、「スターリンの亡霊」の冒頭で、ハンガリー動乱をめぐって最近受け取った多くの手紙のなかから、社会主義者であることを主張するならば、暴力を使ってまでハンガリーの社会主義を救ったソ連に感謝せよという、彼本人に向けられた批判を紹介するが、彼はハンガリー動乱に際し、ソ連の介入を支持している人々に対してきわめて批判的な態度をとっている。

ソ連が、自分自身の社会主義と、ハンガリーで立て直そうとする社会主義とを、自らの行為によって規定したということ、これらの熱狂した人びと〔ソ連がハンガリーに軍事介入することで社会主義を救ったと支持する人たち〕のなかで誰もが、理解しようと望まなかった。この軍事行動が、社会主義陣営の内部関係を力関係に帰着させることによって、自由選挙や中立化政策以上に、守るべき大義名分に対し深刻な損害を与えたかどうかを、誰もあえて考えようとはしなかった。介入が一つの政策の表現であるということは誰も見なかった(S VII, 157-158/131)。

サルトルは社会主義者、共産主義者としてソ連のハンガリー軍事介入を肯定的に捉える知識人たちとは一線を画す。彼は、社会主義諸国の内部関係が、ソ連を頂点とする軍事的な力関係に還元してしまったと、すなわち社会主義、共産主義が大義を失ってしまったと意義づける。その上で彼は、これらのソ連の政策を支持する人びとは、

14 J.-P. Sartre, *Critique de la raison dialectique*, op. cit., p. 31 (『サルトル全集25：方法の問題——弁証法的理性批判序説』平井啓之訳、1962年、30頁)。

もともとハンガリーにではなく、ソ連およびその社会主義構造にしか関心を寄せていないと非難するのである（*S VII*, 163/136）。

なぜならば、スターリンは、個人崇拜の極端な膨張を普遍的に保証するような制度の下で、ソ連と中・東欧諸国による一枚岩の統一的关系を続けるために、ソ連で極限にまで押し進められた社会的統合の唯一の可能な動因として機能し続ける必要があるからである（*S VII*, 231-233/185-186）。

中欧の活動家たちを通してみたサルトルにとって、スターリン没後のフルシチョフ政権は、非スターリン化政策をとりスターリンを否定することに躍起になっていながらも、ソ連および、そのソ連を防衛するための中・東欧諸国の軍事的な統一関係を維持するために、スターリンを悪魔として必要としている点で、逆説的に生前のスターリン崇拜と違いはない。またほかの同盟諸国にとっては、スターリン崇拜は、自らが自主的に生み出したものではなく、ソ連から押し付けられたものである。今度は、フルシチョフ政権が非スターリン化を進めるが、それもまた、ソ連から強制されたものである。したがって、もともとスターリン崇拜そのものに対して自らの意志を反映できなかった同盟諸国からすると、この非スターリン化の作業も、所詮「ロシア人のために、そしてソ連において」おこなわれているだけに過ぎないのである。さらにサルトルは、こうしたソ連による政策の変遷に誤りがあり、かつその誤った方針に同盟諸国が巻き込まれていると批判する（*S VII*, 270/213）。

他方サルトルによれば、非スターリン化主義者たちの側は、同盟国であるはずの人民民主主義諸国に対して「ファシスト、無知蒙昧の徒、エセ信者、偽装したブルジョワの巣」と考えて信用せず、またそれぞれの労働者たちを社会民主主義者とみなして、スターリン的態度を放棄しようとはしない（*S VII*, 268/211-212）。彼はそう捉えた上で、ソ連とその同盟国との政治的・経済的に歪な関係について、「ソ連は人民民主主義諸国を植民地化したのでもなく、組織的に搾取したのでもなかった。実を言えば、ソ連は8年間、これらの国に庄制を加えたのだ」（*S VII*, 250/198）とその特異性を説明するのである。

ここで、サルトルは視線をソ連からフランス共産党へと転じる。単にそれは、サルトル本人がフランスに在住しているという当事者性だけではなく、フランス共産党がソ連によるハンガリーへの軍事介入を支持したためである（*S VII*, 283-284/224）。彼は、ソ連に従うだけのフランスの共産党に対して次のように分析している。

総選挙以来、共産党は終始、同一政策をとってきた。要するに、ソ連が国際的規模で追究している目標を、国内規模で達成しようというのだ。安全を保障し、デタントに寄与し、労働者諸政党の共同戦線の実現によって、共産主義者の勢力範囲を拡大することが必要だった。この政策は、ソ連社会の実質的な非スターリン化によってソ連に押し付けられたものだ。「雪解け」、この恐るべき力の開放欲



求、それこそが、この政策の実現だった。フランスにおいて、この政策は、〈党〉の事実上の非スターリン化、すなわち民主化と真の開放を伴わないかぎり、意味を持ちえないものだった (S VII, 292-293/231)。

フランス共産党は、ソ連がいかなる政策をとろうと、それに盲従するだけの存在である。ソ連が国際レベルでおこなおうとすることを、フランス共産党はフランス国内という範囲で同様におこなっているに過ぎない。フランスにおいても、非スターリン化政策をとり始めたといいつつながら、ソ連の方針に単に従っただけである。〈党〉と大衆との権力関係、ならびにはかの政治的・社会的集団との関係において、何ら変化が起きていない (S VII, 293/231)。つまり、非スターリン化政策が開放を謳いながら、何ら反映されていないとサルトルは批判しているのである。

サルトルは、このようにソ連や諸国の共産党の非スターリン化に疑問を投げかけているわけだが、それでは、どのように左翼のあるべき姿を構想しているのだろうか。非共産主義者の左翼政党や集団は、共産党なしでは無力である。共産党に反対するとファシズムへと道をひらく可能性があるのではないかと彼は危惧する。しかし、社会党も共産党も、それぞれ単独でファシズムに対抗し社会民主主義の基盤の構築によって世界平和に奉仕するほど強力な組織ではない。したがって彼は、社会党と共産党という「労働者の二大政党」が、お互いの手を借りつつ「持続的協調」をおこなえる〈左翼の共同戦線〉の実現を主張するのである。ところが彼は、共産党がこうした統一行動を拒絶していると批判する (S VII, 290-291/229)。

## おわりに

それでもなお、人民戦線の結成を夢見るサルトルは、上記の姿勢をとるフランス共産党に対して、1：ソ連と平等な関係となること、2：真実の情報公開、3：民主化および大衆との接触、4：アルジェリア戦争反対運動への大衆の動員、という一種の「最後通牒」を突きつけたのち (S VII, 306/241)、彼は共産党との訣別を宣言する。

これまでわたしたちが見てきたように、1946年から57年にいたるまで、サルトルは共産党ならびに唯物論者に対し、理論的な面で一貫して批判的な態度を崩さなかったと言える。たしかに彼は、リッジウェイの欧州軍統合司令官就任 (1952年) からハンガリー動乱 (1956年) までの4年間共産党に最も接近した。それは、散在し孤立した諸個人が、彼らだけでは連帯できないために、彼らを主導する集団が必要だったことによる。それがサルトルにとって、現実政治では共産党だったのだ。ところが、その時期ですら、両者は単純な蜜月関係とは呼べず、思想的な不一致を度外視し、政局的な観点からサルトルが共産党を擁護したに過ぎなかった。そうした仮初めの〈同盟〉

など長続きするはずもなく、スターリン没後より非スターリン化政策を掲げながら、「スターリンの亡霊」に取り憑かれ、中・東欧の同盟諸国にスターリン主義的圧制を続けるソ連と、それを支持するフランス共産党に対して、サルトルは最終的に訣別することになった。

ただし、彼はマルクス主義を一方的に斥けるのではなくて、実存主義の立場から独自に「真の社会主義」を標榜して、1960年代以降、実存主義の立場からマルクス主義の再構築に乗り出すことになる。その目的は、現代のマルクス主義が失った、人間とは何かという感覚を回復させることにあった<sup>15</sup>。この「真の社会主義」の理論体系こそが、『方法の問題』を経て結晶化された『弁証法的理性批判』だろう。それは、「唯物論と革命」における「革命の哲学」の理念とも重ね合わせられる。サルトルは、この「真の社会主義」に関して次のように詳述している。

[...] 真の社会主義は、現実の人間たちの現実の実践から切り離すことはできない。彼らは、雇用者や警官に対し、ときには国家やその兵士に対してともに闘う者なのだ。これでもまだ私の言い方は抽象的すぎる。というのも、それは運動でさえもないからだ。違うのだ。それは、前進する人間のことである。彼らは集団化し、互いに鍛えあう。彼らは組織化されるが、組織化されることで自己変革をおこなう。歴史によってつくられるし、歴史をつくる。彼らの活動は、彼らの欲求に基づき、この欲求も彼ら自身と同様に真理なのである (SV II, 275-276/217-218)。

現代のマルクス主義者のように抽象的な観念論に陥るのではなく、現実に生きる人間の欲求による具体的な実践に立脚して権力に対して集団化して闘う。ただし、その集団は集団という一つの凝固した組織ではなく、あくまでそれを構成する諸個人でなければならない。ここに、サルトルが『弁証法的理性批判』で最も理想的とされた「溶融集団 (groupe en fusion)」のかたちが早くも予告されていると言えよう。

15 J.-P. Sartre, *Critique de la raison dialectique*, op. cit., p. 71 (『方法の問題』、前掲書、91頁)